

ドイツの友人イネスさんは薬剤師の仕事のかたわら、教会での活動を基本に、合唱団に加わり、音楽を楽しんでおられます。特にグレゴリアン・チャントを歌う合唱団で歌っておられます。一度楽譜を送っていただきましたが、さっぱり読めませんでした。



訪問教会のマリア・エリサベ像
(エン・カレム イスラエル)

今年は、イギリス人作曲家のジョン・ラター(1945-)によるレクイエムとマニフィカトのCD、楽譜をプレゼントとして送っていただきました。クリスマスなので、まずはマリアの賛歌であるマニフィカトを聞いてみました。

びっくり、仰天！思わず、立ち上がって踊りたくなりました。長年、「わ～が～心は、あ～ま～つ～神を、尊み」と、厳粛に重々しく歌い継いできた日本女性にとって、衝撃的な音とリズムでした。

ラターのマニフィカトはラテン語で、8分の3拍子の軽快でリズムカルな、弾むようなイントロがあって、その後、堂々とした4分の3拍子の歌の部分に入りますが、最後まで、最初のイントロの調子がリードする感じで、全体を引っ張っていく合唱曲です。「軽快に、喜びに溢れて」と指示があります。楽しい！というのが所感です。解説では、ラターはスペインや、メキシコ、プエルトリコのような国々の祝祭にインスピレーションを受けて、この喜ばしいマリアの賛歌を作ったとのこと。つまり、ラテン系です。弱い貧しい、ただの女が、神の働きに用いられる、という喜びが爆発しています。

バッハのマニフィカトにならって、次々とアリアや二重唱の曲が続きます。この中で2番目に位置する曲が、「一本の薔薇、愛らしい薔薇より」です。イギリスの15世紀の詠み人知らずの詩で、これだけは英語で、歌うように作られています。これがイギリス人の作曲したマニフィカトたる所以です。イネスさんはこの曲を歌い始めると、素敵で、止められないとお手紙に書いてきました。これは「穏やかに、流れるように」と指示されている合唱曲です。マニフィカトはマリアが神を賛美している歌です。けれども、カトリックではマリアを賛美する伝統があり、母マリアは天の女王と敬愛されるようになりました。ドイツには「エッセイの根から一輪の薔薇が咲いた、マリアは母となった」(さんびか21248)という15世紀のキャロルがあります。非常に美しい静かなキャロルです。つまり薔薇の花は香り高いイエス様を指しているのです。

イギリスの15世紀の詩は、薔薇の木・マリアは、光栄ある働きをするために、5本の枝を伸ばしたと歌っています。マリアの胸にイエス様が与えられた、すなわち、薔薇の木は枝を伸ばし、一輪の花をつけた、その花は私たちの救いであると歌っています。イエス様が薔薇の花であれば、その母は薔薇の木に違いありません。マリアを薔薇として、敬愛してもいいでしょう。隠喩の世界に誘い、香り高い薔薇として賛美しているのです。実際には、マリアは苦しみを負い、悲しみを味わい、貧しい少女なのに、更に重荷を負うような人生を歩むように、神に選ばれてしまいました。けれども彼女は神の約束を信じ、イエス様を愛し、支え、様々なことを密かに思いめぐらしながらも忍耐し、その人生を生きました。茨の道であったはず。蕾のように、小さい堅い信仰を持って歩きました。

**薔薇は 悪魔の束縛を打ち破るために天の塔から天使を招くような光栄ある枝を、
ベツレヘムの星のように夜空に輝き、昼も夜も見守ってくれるような力ある枝を、
三人の賢者が彼女の赤ん坊の枕辺に導かれてやって来るような広々とした枝を、
地獄まで伸びて悪魔を倒し、そこには誰一人住む人のいないようにする祝福の枝を、
天にまで伸びて、根をはり、実を付け、そこに安心して住めるようにする優しい枝を 伸ばした。**

(Of a Rose, a lovely Rose より抄訳)